

Title	ベッティー著, 政治算術(大内兵衛譯, 栗田書店發行)
Sub Title	
Author	渡邊, 基
Publisher	三田史学会
Publication year	1943
Jtitle	史学 Vol.22, No.1 (1943. 9) ,p.68- 70
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19430900-0068

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都合十三卷といふ尅大なものであるから、これを讀破することは容易なことではない。しかるに著者自身によつて別に抄本一卷が公にされたのであつて、永橋氏の翻譯はこの抄本によられたのであるが、それにしても譯稿にして三千枚にのぼり、従つて上中下の三冊に分たざるをえなかつたといはれ、この上巻にしても本文五〇四頁の大著であつて、決定版の有する豊富な脚註が失はれ、例證が減じてゐるといふのみで、その理論的部分はことごとく保有されてゐるのであるから、彼の學説をうかがふべき最良の書といつてよい。もちろん彼の研究法や學説については、今日種々の批評がなされるにしても、民族學を口にするかぎり、本書の一讀を怠つてはならない。

評者はかつて本書をよんで、その冒頭のネミ湖畔のくしき物語にいたく興を覺えてゐたところ、昭和四年の春はからずもこの地に遊ぶことをえたが、樹木の繁茂せるは湖畔の一小部分であつて、心ひそかに想像した幽邃は全くみられず、景觀はむしろ索寞たるもので、いささか興醒めを感じたが、それほど本書の敘述は人を魅するに足る名文と言へよう。永橋氏はすでに同じ著者のサイキス・タスクの譯者として知られ(岩波文庫)、斯界の一權威であるから、本書の譯者としてまことにその人を得たといふべく、これを江湖に推薦するとともに、中巻、下巻のすみやかに完成されんことを祈つてやまない。(松本芳夫)

ペッテイー著政治算術(大内兵衛譯) (栗田書店發行)

高野岩三郎博士の監修になる統計學古典選集十二卷十四篇の含むところの大部分は十九世紀の著作に屬するけれども、その中十七世紀の著作が二篇だけ收載せられてゐて、近世思想史研究者の關心をひいてゐる。即ち、グラントの「死亡表に關する自然的政治的考察」(一六六二年)と、此處に紹介せんとするサー・ウィリアム・ペッテイーの「政治算術」とである。

サー・ウィリアム・ペッテイーは一六二三年(元和九年)にハムプシャー州ロムジイーに生れ、青春にして名譽革命の疲風怒濤を體驗し、醫學者、大學教授、アイルランド行政官、地主として破瀾にとんだ生涯を送り、一六八七年(貞享四年)にこの世を去つた。この短くない生涯を通じて彼はかはることなく學問を愛し、經濟學、統計學、醫學、物理學、機械等について數多くの著書を殘した。就中彼の經濟論は學史家によつて極めて高く評價され、價值論及び價幣論におけるすぐれた洞察の故に「近世經濟學の建設者」を以て目されてゐるのであるが、のみならず統計學史上に於てもなみ／＼ならぬ足跡を殘してゐるのであつて、この「政治算術」及び「アイルランドの政治的解剖」の不朽の二著を殘してゐる。彼以前の國家社會に關する認識がいづれも抽象的又は形而上學的辯證にもとづいて組み立てられ、その結果どうしても國家社會の現實から游離した一種のドグマになり勝であつたの對して、ペッテイーは一の全く新しい方法を創始した。即ち彼

はその眼を以て深く自ら經驗する社會事實を觀察したに止らず、更に廣くこの事實をイギリス全般の、更にまた世界各地各國の事實と比較し、これによつて個々の事實の世界的又は時代的意義を明らかにせんとした。かゝる要求に基き彼は一見多様に現はれてゐる社會の諸事實を極めて簡単な公分母によつて要約することがこの目的のために有利にして且つ必要な方法であると考へた。かくて此處に社會的現實に對する統計的思考が確立されるに至つたのである。そしてかゝる方法を彼は自ら政治算術となづけた。本書「政治算術」はこの方法に基いて當時のイギリス社會經濟の現實を分析し、イギリス王冠の榮光とイギリス商業の世界征覇の可能とそのため方法を論じたものであつて、一讀して國家權力と社會經濟の「いはゞ筋肉と神經と」の見事なる把握感得の程が我々を強く打つ。社會經濟的認識の發達史上における一の劃期的な道標として、およそ近世經濟思想史を研究するほどの者にとつての必讀の書であるといふことが出来る。この書が今大内兵衛氏の老練流暢な名譯によつて邦語化せられたことはまことに慶賀にたへない。

本譯書には譯文(一二八―二九九頁)の外、譯者解説とC・H・ハル博士の「『政治算術』の版本について」なる一文を併せ收めてゐる。譯者解説は八章一一六頁にわたつて、ハッティの時代、生涯、著書を略述し、經濟學者として、統計學者としての彼の業績を要約し、政治算術の方法的意義を述べ、本書の大意を簡明に要括し、最後に彼の學史的地位を規定したもので、その手並はずこぶるあざやかである。就中、彼によつて新しい方法が創始され

得た歴史的基礎を解明したあたり(九三―三頁)はすばる興味深いものがある。曰く、「私見によれば、これは彼の問題とした社會、最も具體的にはイギリス、ロンドン、ダブリン、パリ、ローマ等々の社會が、その社會的諸關係が、極めて廣い範圍において數字的表現をもち得るものとなつてゐた。従つてまた現實にもそれが統計として表現されはじめてゐたといふ事實の出現にその説明を求むべきである。といふのは、このときイギリスにおいては、昔の封建的な諸關係はほぼ解消しつくし商品生産と貨幣による生産物の賣買が社會關係の全面を支配するやうになり、土地も家屋も衣食住も勞働力も皆それら貨幣的表現を得てゐたのである。そしてそこにおける富の増加とは、もはや君主の消費物の増加としてのみ現はれず、國民の、地主の、都市の、要するに市民社會の富の増加として現はれてゐた。そしてその富は、そしてその人間さへもが、大部分において貨幣の數値をもつてゐた。即ちその意味において、社會は當代に及んではじめて共通の分母において公約され、統計的乃至は數字的計量の對象として熟さうとしてゐたのである。それ故人あつてこれを銳利に觀察し、これを時代的に又は世界的に比較するならば、即ちそれに對して近代の科學のメスを用ひさへするならば、それ等社會關係に内在する諸關係そのものの生成發展の諸形態は自ら檢出し得べき状態にあつたのである。政治算術はそのメスであつた。」

右の譯者所説によつて社會の統計的認識成立の客觀的基礎はほゞ明らかであるが、この際つけ加へてその主觀的基礎も問題とされねばならぬだらう。彼が貧しい織元の子としてつまりは「農

村の織元」の中から生れたといふ事實はこの點について極めて暗示的である。當時の農村の織元の經營形態であつたところの工場制手工業と力學的世界像との關聯については既に技術史家、自然科学史家の多く認めるところであるが(參照豊田四郎「テヒノロギーの系譜」三田學會雜誌三十四卷十號所載)この力學的世界像が自然の量的把握であつたと同じ様に社會の量的把握であるところの統計學が外ならぬイギリス手工場の子であつたといふことは、まさに一の世界史的必然であつたのではないであらうか。

右の解明はまた逆に我が國の如きに於いて何故近世經濟思想史上統計的把握の展開が遂に見られなかつたかといふ點の解明に一の光明を投ずるものと言ふことが出来るのである。我が近世經濟思想はその全期を通じて遂にベツティの段階にまで到達することが出来なかつたのであつて、そのことの歴史的な意義をわれわれはベツティを精讀しつゝいろいろと學びとることが出来るのである。

ついでながら、我が國統計學の祖といはれる杉亨二博士が長崎の時計師上野俊之丞のもとで「時計だの眞鍮の道具だの色々の物を拵へる手傳をし」つゝ少年時代を送つたといふことは興味深い。この上野家及び長崎の時計工業の生産形態こそ不明であるが、幕末の時計産業は少くもその最大の中心地名古屋地方に關する限り工場制手工業の段階にあつたことは最近山口隆二氏の研究(「日本の時計」昭和十七年、日本評論社刊、なほ大塚久雄氏の書評社會經濟史學十二ノ七參照)によつて明らかである。又彼の回想中に「弱年の頃より折角人に生れた上は人のする事は人がす

る、人のせぬ事をして置きたいといふ一念は何處やら心に存して居つた、これが私の心に統計に志した種子を蒔いた様に覺えます」(杉先生講演集二四頁)と云はれるこの分業的のモラルなどと考へ合はせると、統計學が我が國においてこの人物をその祖としたことには一定の歴史的な意味があるやうに思はれる。なほ彼が明治三年七月政表調査に際しての建白書において、四民通婚の自由、土下座禁止、等の「奴隸の醜俗」「人に區別を立仕切を付候事」を廢止し、それによつて「上下隔絶之弊無之様」にいたし、「上下合體」を相貫くことを、政表調査成功の前提として、要請してゐる(杉先生講演集附録二七—三二頁)ことは、封建制と統計との關係について興味深いものがある。(渡邊 基)